

学 位 論 文 要 旨

氏 名 片山 宗紀



論 文 題 目

「薬物使用に対するスティグマの把握と低減方法の検討」

指 導 教 授 承 認 印

稲田 健



薬物使用に対するスティグマの把握と低減方法の検討

氏名：片山 宗紀

1. はじめに

スティグマは「ラベリング・ステレオタイピング・分離・社会的立場の損失・差別といった要素が、それを維持する力の下で存在している、複雑で多面的な社会的プロセス」と定義され(Link & Phelan, 2001; McGinty & Barry, 2020; Thornicroft et al., 2022)、メンタルヘルスの問題を抱える人たちに否定的な影響を与える。

中でも大麻・精神刺激薬・オピオイドといった違法薬物を使用する人(People Who Use Drugs:以下 PWUD)は物質使用に伴う直接的な害以上に、スティグマによる社会生活への否定的影響が無視できない。しかしながら、PWUD に対するスティグマに関する全国的・定量的な調査は日本では存在せず、一部の専門家による個人的発信に限られる。そこで、本研究ではPWUD やその家族との協働により薬物使用に対するスティグマを定量的に把握可能な日本初の尺度を開発し(研究 1)、全国の精神保健福祉センター(研究 1)および 1 都 2 県の依存症専門医療機関(研究 2)に調査を行ってその実態およびスティグマに影響を与える要因についての調査を行った。そのうえで、PWUD に対する支援者のスティグマを低減するための研修会の効果検証を行った(研究 3)。

2. 方法

【研究 1】精神障害に対するスティグマを測定する Link スティグマ尺度をベースに、文献レビュー及び PWUD と家族計 8 名に対してインタビューを行って、薬物使用に対するスティグマ尺度(Drug Stigma Scale:以下 DSS)を開発した。その上で、全国の精神保健福祉センターの支援者を対象としたアンケート調査を行い、DSS およびスティグマに関連すると思われる項目について聴取した。回答結果について単純集計を求め、DSS の因子構造を把握したうえで、DSS および各因子を従属変数とした一般化線形混合効果モデル分析により尺度得点に影響すると思われる要因の分析を行った。

【研究 2】研究 1 にて開発された尺度を用いて、1 都 2 県に所在する依存症専門医療機関の医療従事者を対象に研究 1 と同様の調査を行った。単純集計を求め、研究 1 にて示された因子構造の検証を行ったうえで、DSS および各因子を従属変数とした一般化線形混合効果モデル分析により尺度得点に影響すると思われる要因の分析を行った。

【研究 3】全国の生活保護担当ケースワーカー、精神保健福祉相談員、精神保健福祉センター職員を対象とした研修会を実施し、DSS を用いてその効果を検証した。

3. 結果

【研究 1】インタビューおよび文献レビューより、24 項目の尺度が開発された。18 項目

の因子構造が示され、公的支援機関の支援者は顕著なスティグマ的態度を有しており、支援経験を通して増悪する傾向にあるが、支援者自身の相談経験や当事者との協働経験によって軽減できる可能性がある事を把握した。

【研究2】因子構造の安定性が検証された。更に依存症専門医療機関の医療従事者は自治体職員よりも強いスティグマ的態度を有していること、支援者自身の相談経験や、当事者との協働経験が研究1と同様にスティグマの軽減要因となることを確認した。

【研究3】支援者として活動するPWUDと協働で地域の支援者を対象とした研修が支援者のPWUDに対するスティグマ的態度を軽減する効果がある可能性を明らかにした。

4. 考察

本研究より、日本において薬物使用の経験がある事によってその人の価値を下げて信用を失わせる作用がある事、そしてPWUDとの協働によってスティグマに対処することの重要性和有効性が示された。当事者と連携して対象者の支援に当たる事はアディクション領域における一つの活動スタイルとして古くから知られているが、必ずしもこの支援モデルは一般に普及していない。それゆえ、PWUDに対するスティグマの軽減という観点からも、このような協働モデルを支援者の養成における基本的な考えとして積極的に普及していく事の意義は大きいと考える。

5. 結論

薬物使用がある事によって経験される社会生活における様々な差別や機会損失は当事者の健康や安全を損なっている。本研究の知見を通してPWUDの安全な社会生活・健康増進・地位向上や薬物使用に対する理解が促進されることを期待する。